
おまもりひまり 新世代の鬼斬り役

超人カットマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまもりひまり 新世代の鬼斬り役

【ISBNコード】

N7576W

【作者名】

超人カットマン

【あらすじ】

ある日、ある事件によって天河家の鬼斬り役「天河優人」が行方不明になる。そんな中近づく新たな妖と人間の危機。この危機に新しい天河の鬼斬り役「天河優来」が立ち向かう。

これはおまもりひまりを原点とした、もしもの物語。

登場人物紹介

主な登場人物紹介

天河優来（あまかわゆうき）
この小説の主人公。12歳。

イメージCV（松本梨花）

天河優人と神宮寺くえすの間に生まれた子供。その為、天河家に伝わる光渡しは勿論の事、簡単な西洋魔術も軽々扱いこなす。また、どちらかというと気性が荒い為、かなり戦闘向きな鬼斬り役。主な戦法は、天賦の才で編み出した我流の格闘技と、大きめの斧剣を使った攻撃。

どちらかと言うと母親似の容姿をしている。その母親とは折り合いが悪く現在別居中。

家事全般は基本的に上手な方で、特に料理の才能は皆から一目置かれている。
家で玉藻前を飼っている。

玉藻前（白面金毛九尾の狐）

天河家で飼われている妖。

かつて天河優人らに倒され、それ以来天河家に居ついている。

子供の姿だつたり成人女性の姿だつたりキツネだつたり、様々な姿で優来のそばにいる。一緒に風呂に入りたがつたり寝たりしたがるほどの優来LOVE。

緋鞠

かつて天河優人とコンビを組んでいた化け猫の妖。

今まで野井原にいたが、優来が鬼斬り役になつた事で再び天河の元にやつて來た。

優来の事は基本「若殿」と呼ぶが、先代の優人と区別をつけるさいは「若君」と呼ぶ。優来は護る必要がないので今回は「懐刀」を自

称している。

烈火 イメージCV（野中藍）

緋鞠から生まれた新世代の「野井原の緋剣」
基本的にはまだまだ母親である緋鞠には敵わないが、秘めている可
能性は爆発的に高い。

転校生という名目で優来を近くで護衛している。緋鞠と比べると現
代的で元気がいい。

静水久

かつて天河優人の仲間だった蛟の妖。
これまで一時的に里に帰っていたが、優来が鬼斬り役になつた事で、
少し遅れて優来と合流する。
水を操る術に優れる。

九崎凜子（くざきりんこ）

優来の父親、優人の幼馴染で現在も天河家の隣に住んでいる。
元々普通の商社に勤めていたが、とある企業との業務提携のさい、
相手企業から集金し戻る途中に相手と自身の会社が一度に倒産し、
その後集金した金を使って始めた企業が大成功し、今では日本を代
表する実業家になっている。

相変わらず天河家との関係も続いており、優来のことを気にかけて
いる。

柘木泰三（まさきたいぞう）

優来の父親、優人のかつての友人。

現在は雑誌の記者をやっており、特に妖やそれに準ずる何かの取材
を得意としている。

かつてある事件で妖を退治する優人と緋鞠の姿を見てから妖について
関わるようになり、自分を取り巻く一部の人物が妖である事を理

解している。

嶋村有（しまむらゆい）

かつて優人らと同じ学校に通っていた女性。
現在は警察組織の公安4課に所属しており、妖やそれに準ずる何か
による事件の調査と解決をしている。

リズリット・Ｌ・チエルシー

天河家に近所にある喫茶店「カフェ・リリッシュ」をきりもみする
付喪神の妖。愛称は「リズ」

玉藻前の手回しにより優来とは以前から面識がある。しかし、基本
的に気性の荒い性格の彼は苦手らしい。

明夏羽

かつての優人と共に戦った飛縁魔という妖怪。
過去に何度も優来に戦いを挑み、そのたびに撃退されている。皆の
中で一番遅かつたが、沙砂と共に優来と合流している。

沙砂

かつて優人と共に戦った一本ダタラという妖。
これまで里でのんびり暮らしていたがしていったが、明夏羽が優来
と合流するにあたって半ば強引に連れてこられたらしい。

加耶

野井原にある天河本家に住み着いている座敷童子の妖。

かつての優人のように優来のことは嫌っていないが、それでも苦手
意識を見せる事が多い。

神宮寺くえす

優来の母親であり、神宮寺家の現当主。

魔術の腕前は相変わらず上昇しており、使える魔術は増えている。その内の一つを常に行使している為、自身の容姿は20代前半からまるで変わっていない。

優来と折り合いが悪い。

天河優人（あまかわゆうと）

優来の父親。

かつては天河家の当主として鬼斬り役を行い、妖と人間の関係を護つていたが、かつてある事件に巻き込まれ生死不明の状態で行方不明になる。

I 四回 プロローグつまごもの（前書き）

この話は、内容によって語り手が変わります。今回の語り手は優来です。

一回目 プロローグつぽいもの

その日も、僕天河優来はいつもと同じように田代に田代を覚める事になる。日付が変わり日が昇り、外では小鳥達が互いに挨拶を交わし始める。そして僕は、近くに置いている田代ましが五時半を指すころに一度目覚め、その後二度寝を開始する。朝食の時間までまだ十五分、それまではもう少し寝ていよう。

「ねえ優来、起きてよお。」

しかし、僕の安眠を邪魔するのがやつて來た。うちで飼っているキツネである。食欲が十人前はあるうちのキツネは、いつも餌付けの時間が待ちきれないのかこうして僕を起こしに来る。え?なんでキツネが喋つてるのかって?実はこのキツネは妖怪なのだ。父親の代からこの家に住み着いており、今は僕が面倒を見ている。昔父と仲良くしていた人から聞いたが、いつまでもこのキツネは子供なのだという。なんだか永遠島の住人みたいだな。

「へいへい、今起きるよ。」

どうせ今は一度寝なのだ。基本的にいつも起きているのだから、今から朝食を用意するとするか。

手っ取り早く材料を集め朝食を作る、今朝のメニューはハムエッグをはさんだサンドイッチと野菜スープである。

目の前の皿に5個積み上げられたハムエッグサンドの一つをほおばつているキツネを見て思った。姿は成人しているのに、本当に子供だな。今僕の目の前にいるキツネは、キツネでありながらキツネの姿はあまりとらず、基本は人間の姿で居る事が多い。今は成人女性の姿である。他にも幼い少女の姿を取る事もあるが、かなり稀な場合である。

「つておい、卵の黄身が付いてるぞ。」

しかし、それ以前に僕は彼女の頬についている卵の黄身が気になつた。なんだかなー、こうしてると姉と弟、新婚カップルというより父と娘だな。僕まだ12歳なのに、

「はい、あーん。」

目の前のキツネは、僕の考へてる事なんぞどうでもいいのか、野菜スープの入ったスプーンを差し出している。

「あんなあタマ、もっと普通に口に上がる事はできないので？」
僕は中途半端な敬語をふくらんだ言葉を返してやつた。使い方あつてるかな？

「ええー、新婚カップルってみんなこれやってるのにー。」

タマはいかにも残念そうに言つた。つていうか新婚カップルのつもりだったの、僕は父と娘のつもりだったのに。それ以前に今度は何処のドラマの影響を受けたんだ。

「つていうか、後15分で家出る時間だから、そういう事してる場合じゃないの。」

僕はそう言つと、自分の分の野菜スープを一気に飲み干し、そのまま自分の使つた食器を片付けた。その間、タマは素早く自分の食事を片付けていた。

「それじゃあ行つてくるけど、昼飯は冷蔵庫の中に入つてるからな。
僕はタマに昼飯の保管場所を教えると、通つている小学校へ向けて歩き出した。

「頑張つてね〜〜〜

タマは本当に呑氣だな、まああの漫画のあのキャラクターのように学校までおしかけてこないからまあいいか。なんてことを考えながら

ら道を進む、そしたら途中で石垣のよつつな形の壁がある場所につく。

「おーい、シロ！」

と呼びかける、すると石垣の上に真っ白い毛並みをしたネコが現れた。真っ白いから「シロ」である。ここを住処にしているようで、いつもこの時間になると出てくるのだ。しかし、今日は出てくるだけ終わってしまった。いつもは壁の上から降りてくるのだが、何があるのかすぐにいなくなってしまったのだ。

「まあ、いいか。」

とりあえず、遅刻とまではいかないが時間が迫っていたので、学校へと向かっていった。

今日の午前中の授業も終わり、昼休みとなつた。この時間、僕は何をしているかというと。

「僕のターン！…ドロー…！」

屋上で悪友達とこそつりカードゲームをしている。現在自分のターンにある。

「モンスター召喚！無限攻撃の布陣にセツト…！」

これは僕のデッキの一番の強みで、布陣が崩れない限りいくらでもアタックできるのだ。では早速、という瞬間、

屋上の扉が開いて誰かが入ってきた。突然の事態に僕たちは驚いた、しかし、相手はうちのクラスの中で最も大人しいと言われている女子生徒だった。でも、変に俯き何か様子がおかしい。

「見ツケタ。」

少女が言った、見た目とのギャップがひどい声だった。というより声聞いたことなかつた。これは普通な少年の反応である。しかし自分は違う、この一言だけでも十分分かる、かなりやばいと。

「早々二始末シ、ソノ肝喰ライ尽クシテヤル。」

「なに言ってんだ？ あいつ。」

少女の言葉を聞いた仲間達は不思議には思つてゐるよつた。だが、今日の給食は焼きそばだったよな、と言つてゐるよつでは否氣すぎるので、

「僕が合図したら、いつでも逃げられるよつとしておいてよ。」
と、彼らには伝えておいた。そしたら、少女は意味の分からぬ叫び声を上げて飛び掛ってきた。背中には虫の足のよつな物が出てきている。とてつもなくシユールだ。

「な、なんだあれ？？！」

周りの仲間は驚いている、まあ当然だ、あれは妖怪に取り憑かれているのだから。

「とにかく、数秒くらゝは足止めしないと。」

なので僕は、とりあえず適當な構えを取つた。見よつ見まねの八極拳と龍が如くの秋山風蹴り技を合わせた拳法で迎え撃つ。そう思つたら、背後からまた気配を感じた。

「勝手なことをしてもらつては困る、いやつは私の獲物じや。」

見ると、日本刀を持した女性が手すりの上に立つていた。

「え？！－誰？！－？」

「つーか銃刀法違反？！」

次から次におこる予想外の事態に、仲間は皆混乱している。現れた女性が僕を見据える、これが僕と彼女のある意味初めての出会い。そして、鬼斬り役天河優来が完成した瞬間であつた。

一回目 プロローグっぽいもの（後書き）

かつて天河優人と組み、妖退治を行っていた緋鞠の登場で優来の鬼斬り役としての日々が始まる。そして……

次回「ネコとキツネの一悶着、そして転校生」

一回目 ネコとキツネの一悶着、そして転校生

????視点

「こやつは私の獲物だ。」

ついにでもたつてもいられず出てきてしまったが、手早く片付ければ問題ないじやろ。問題の人物は私を警戒してるようじやが、大抵の事では動かんじやろうな。

「我刀を抜くは妖のみ、我滅するは妖のみ。」

私はいつも通りの決まり文句を述べ、相棒「安綱」を抜いた。後ろでは銃刀法がどうのこいつのと言つておるが、今は気にはまい。

「せい！はああ…！」

源爺より仕込まれた剣術で相手を追い詰めるが、相手は人の身ながらも身軽な身のこなしで私の斬撃を回避する。20年前よりも厄介な相手だと思つていて、ふいに横を誰かが通り過ぎる。通り過ぎた人物を見た時、私は唖然とした。私が最優先して護るべき少年が、妖相手に向かつっていくのだから。

「あ、危ない…！」

私は思わず叫んだが、時はすでに遅し。妖は少年を切り刻もうと背中の足を振り上げていた。

「…………」

きっとここにいる全ての人間が息を呑んだだろ。蛮勇で妖に向かつていつた少年が、今までに血祭りに上げられようとしているのだから。

「光渡し、右足強化。」

ふと少年がこんな事を口にした。すると、突然右足が眩い光に包まれ、光がやんだ時彼の右足は炎を纏っていた。

「せい…！」

少年はその右足を振り上げると、相手の妖の触手を蹴り飛ばした。

その右足が地に付いた瞬間、今度は右足と同じ要領で右腕が光りだした。

「ファルコンパンチ！！」

少年は渾身の力でパンチを放った。技の名前はまあ気にしまい。「キ、キイイー！」

的確に鳩尾を捕らえたのだろう、乗り移っていた身体では衝撃に耐えられなかつたようで、妖は乗り移つていた少女の身体を捨てて逃走をはかろうとした。しかし、それを許す私ではない。安綱を振り上げ、妖を袈裟懸けに切り伏せた。

私はこれで去つたが、あの後彼は倒れていた少女を仲間と協力して保健室へ運んだらしい。きっと今に男前になりそうじや。

？？？ 視点 終わり

優来視点

「えーと、今日は突然化け物が現れて、突然出てきたお姉さんがそれをやつつけて……」

家に帰つてから僕は、今回の出来事を振りかえつてみた。

「まあいいか、暇な時考えよ。」

時計はすでに11時を指している、さすがに眠いので寝ることにする。宿題はやりかけだけどまあいいか。

「なんじや、もう寝てしまうのか？つまらない男じやな。それに宿題は全部やつたほうがよいぞ。」

すると、布団の中から声がした。いつも聞いているタマの声とはまた違ひ、この声はどこか妖艶さが感じられた。タマの声は基本少女のような清純無垢なものである。

恐る恐る布団の中を覗くと、そこには長い黒髪と端正な顔立ちの美女がいた。

「つて！タマでもないのに何時入った？！」

僕は驚きの余り、これほど出せるのか、と思える程の大声を出した。「なんじゃ、幽霊でも見たように叫びあつて。」

布団の中から出てきた女性はこう言った。しかし、改めて見るととても魅力のある女性だと思った。確かにタマも背が高いし胸も大きい、また以前はお妃様だったらしく割と礼儀正しい。そんな彼女には無い、違う印象を持たせられる女性だった。そして良くみると、昼間学校遭遇した相手であった。

「どうしたの、優来？」

眠そうに眼を擦りながら、問題の人物がやつて來た。そしてタマは、まるで夫の浮氣や不倫の現場を日撃したような反応をすると、

「マスター相手に何やってるんですか？！？！」

頭からは耳を、腰から尻尾を三本出して、現れた女性と一緒に悶着始めた。

「なんだかなあ―――。」

僕はただ見ているだけしか出来なかつた。

「よつするに、また妖が天河の人間を狙つかもしれないから、つて事でここに来たわけね。」

僕の家の隣に済んでる凜子おばさんが言つた。今僕たちは天河邸のリビングに集まつており、メンバーは僕とタマと凜子おばさん、そして「絆鞠」と名乗る僕の布団の中のいたお姉さんである。何故凜子おばさんがいるかと云つと、やたらと喧しがつたから気になつて見に来たらしい。今度謝つておこう。

「何も初対面まで先代と同じようにしなくてもいいのこ。」

凜子おばさんは呆れている。

「それに、今回の若殿は猫アレルギーではないようじゃな。」ひかり
としても都合が良い。」

「なんの都合がいいの？」

またもタマが緋鞠に食つて掛かっている。おばさんは、ここ今まで20年前と一緒に、と昔を懐かしむように言つていて。

「はいはいはいはい、一旦やめなさい。」

これ以上緋鞠とタマに家中を荒らされたくないのと、二人の間に入つて制止した。

「優来（若殿）はどうやら味方なんですか！（なのじやー）」

二人の声が途轍もないレベルではもつた。

「僕はあくまで中立、これ以上家の中荒らすんだつたら追い出しますよ、タマ。」

とりあえず僕はタマに釘を指してみた。

「そうですか、優来はキツネよりネコが好きなんですね。」

タマは面白いマンガの中のキャラクターのようにいじけている。

「それもそうじゃ、好き好んでキツネを傍に寄りす者などおりぬわ！」

そして緋鞠は、お嬢様VSお嬢様の戦いに勝ったお嬢様のような態度を取つていて。あんたはルチア様かつての。

「ええ分かりました！いいですよーここにいればいいですー但し条件があります！！」

タマはもはやヤケクソになっていた。

「一つ、ちゃんとこの家のためになる事をする事。一つ、優来に向かあつたら出て行くこと。三つ、優来に有害な事をしない事。」

「最後の一つ、お前にいたことか？タマ？」

この家により長くいるものとして緋鞠に条件を突き出すタマに、多分ジト目になつていただろう、僕は言つてやつた。

「お前、僕が寝ているときに を×××したり。風呂に侵入してきて を要求したり を行つたり他にも……」

僕はこれまでにタマが行つた色々なエロエロな事を暴露した。

「へ？？？」

凛子おばさんは田を丸くしており、

「お主！なんて羨ま、じゃなくて破廉恥な事を！」

緋鞠は同様の余り、つい素に戻ろうとしていた。

「素を出したな淫乱猫、あなたの内の黒々とした物はすでにお見通しです。」

タマはいつの間にか余裕を取り戻していた。

「なんじゃと！この脳筋狐！」

「脳筋ではありません。私の頭の中は常にお花畠なだけです。」

「言っておくが、僕の頭の中は常に処刑場だけど。気に入らねえ奴をリンチにする事にしか興味ないんで。」

再びドロドロした展開になりそつだつたので、僕は得意の殺氣攻撃を行つた。結果、一人を一度に黙らせる事ができた。

時計は深夜の一時、今夜はかなりの夜更かしになつたな。

優来視点 終わり

？？？視点

それは突然の変化だった。突然お母さんに呼ばれて戻つてみれば、渡されたのは転入届けとランドセル、そして小学校の教科書一式。これから学校に行けといふのか。

これから私の担任になるという女性教師の後を続きながら私は思つた。

「えー、突然だが今日は転校生を紹介する。」

まず最初に教室に入った担任は、クラスの生徒にこう言つてから。

「それじゃあ、入つて來い。」

と私は呼びかけた。まあいいや、出来る事だけやる事にしよう。

「初めまして、×小学校から転校してきました、野井原烈火です。」

たつた一晩で母から叩き込まれた挨拶を囁まずに言い終えると、

「それじゃあ、野井原の席は……」

担任は教室内を見回して言つた。私は目的のある生徒に近くに行くと、

「ここがいいです、変わつて貰えませんか?」

と、問題の席の生徒にたずねた。

「え? いいけど。」

席の生徒は、いきなりの事に驚いたようだが、何もなく変わつてくれた。

席に座つた所で、

「初めまして天河優来。私は烈火、野井原の緋剣こと緋鞠の娘です。」

隣の席の生徒、天河優来に自分の自己紹介をした。

烈火視点 終わり

I | 四月 ネコヒヤシネの一悶着、そして転校生（後書き）

次回予告 優来の悪友の一言で決まった海水浴。タマや緋鞠も参加して大騒ぎになる中、優来に妖の魔の手が迫る。

次回「海と蛇とナメクジ戦法」

海と蛇となめぐじ戦法

優来視点

「海にいこうぜ！！」

今日の話は、数日前に僕の悪友の一人が発した一言で始まった。そして彼の言う会場は、私有地の多い高級別荘地のある場所であった。「子供だけでそんな場所にいけるとでも？」

と僕が言うと、

「実は俺の親がそこに別荘とプライベートビーチを持つていてさ。今度の連休で使わせてもらえる事になつて、みんなもどうかって。」
彼が言うには、食事も移動手段も遊びも満足させる自身があるという。

「面白そつ、私は参加するね！！」

一番最初に参加を名乗り出たのは、突然転校してきた謎の少女、野井原烈火だつた。転校してきたのも、僕が鬼斬り役になるにあたつて母親である緋鞠に呼ばれたわけであり特に謎ではない。

そしてその後も続々と僕の悪友達が参加を表明し、結局僕も参加する事になつてしまつた。

「と、言うわけで。」

「と、言つわけで、ではない。私に一言も無く行くつもりではなかつたんじゃないだろうな。」

学校からの帰り道、僕は隣を歩く純白の毛並みのネコに言つた。このネコは化け猫の妖であり、名前は緋鞠といつ。外を出歩くさいは主にこの姿をとるらしい。

「無断なわけないじやん、こうして今言つたじやん。」

「まったく、よりによつて烈火まで行くとは。まは。」

緋鞠はとても不満そうだ。

「もしかして行きたかった？」

「べ、別にそういうわけじゃ……」「

返事が曖昧だ、どうやら図星のようだ。

「まあ、一人くらいは大丈夫なんじゃない。」

と、僕が言つと、

「ほう、よいのか？」

と言つた、どうやら嬉しいようだ。

「でも、嫌でも”アイツ”だけにはばれないよつこしないとな。」

「それもそうじゃな。」

僕達がこう言つた途端、

「どうしたの？」

背後から声が、しかも”あいつ”的の声だつた。
この瞬間、僕は終わつた、と思った。

当田の事である、

「来たぞー！」

僕は集合場所の駅前にやつてきた。一緒に烈火と緋鞠、そして”邪魔者”が一人である。

「ああ、来た…か…」

悪友達は、僕達を見た途端固まつた。僕や烈火はともかく、長い黒髪の和風美人と、金髪でスタイルの良い美女が付いてきているのだ。

「ああ、すまん。人数増やしちゃつて。」

僕は一応謝つた。

「い…いやいいよ。賑やかなのもいいと思うじ。」

今回の計画を出してくれた悪友はこう言つたが、

「とりあえず、邪魔な場合にいつけは追い返せるから。」

と言つて、”アイツ”兼”邪魔者”ことタマを指差して言つた。

「ちょっと、それは無いでしょ。」

タマは当然といえば当然のようになんて不満そつと言つた。

「ちょっとちょっと。」

突然僕は悪友たちに呼ばれたので、とりあえず近くの建物の陰に集まつた。

「それにしても優来さん。あの一人は親戚か何かで？それ以前に女人連れとはやりますな。」

「勝手についてきたんだよ金髪の方は。」

僕たちが秘密の会話をしていると、

「なんなんですか、その一方的な邪魔者の括り。」

タマが文句を言つてきた、そういうえばこいつ凄い地獄耳だつけ。

「そういうわけだから、お願ひ。」

仕方がないので、うまく皆を説得することとタマと緋鞠も『一応』参加できるようになつた。

優来視点 終わり

烈火視点

私たちの町から車で約三十分、閑静な別荘地にやつてきた私たちは、別荘に荷物を置いて浜辺へとやつてきた。

「海か、初めて見たな。」

笑つているかのように『機嫌な太陽、焼けそうなほどに熱い砂浜、そして宝石のように輝き、どこまでも広がる海を眺めがら私は思つた。しかもここは、所謂プライベートビーチと言つらしく、私たち以外は誰もいない。』

そして、用意したセパレートタイプの水着の反応は、まあまあだつ

た。聰明な読者は理解できるでしょう。発展途上娘にとつての天敵が来ているのだ。恥ずかしながら一応我が母たる紺鞠はともかく、タマさんのおっぱいは初めて見たが、一言でいう圧巻であった。

「どうやつたらあんな大きさになるんだらう。」
仮も昔、天皇に愛された女性だつただけあり、どこまでも立派である。触り応えがありそうだ。

「実際にさわり心地いいぜ、ゴム鞠みたいで。」

「え、優来？ テレパシーですか、なんで私の考えていたことが。」
優来は、あの人の水着姿をみたら誰でも最初にそう思うんだ、と説明した。って言うより、なんで明確な比喩が出たんだ？

「そんな事より泳ごうぜ！」

優来に連れられ私は海に向かつた。それにしても、優来の肌つて綺麗だな。

烈火視点 終わり

??? 視点

「見つけた、鬼斬り役。」

すぐ下のビーチにて海に入つてビーチボールで遊んでいる少年を見ながら私は思った。一見すれば、何の害もない普通の子供だけど、私たちにはこれ以上ない害敵。これ以上力をつける前に始末するのが妥当なの。でもその前に、

「おわり。」

もうちょっととかき氷を食べよう、あと1~5杯くらい。

??? 視点 終わり

「キヤハハハハハハ…！」

目の前に広がる大水の中を、まるでモーターーボートのよひで泳ぎ回る烈火を見ながら思った。子供は怪物というが、本當だ。にしても元氣が良すぎる、自分がカナヅチなのを知つてか知らないでか、どちらにせよ今の今までずっとここで泳いでいる。

「相変わらず水は苦手なんですね。」

「こりいいながら近づいてきたのは、若殿に害をなす仇敵。

「そういう訳ではない、ちゃんとお風呂にだつて入れるし、水浴びだつて。」

「要するに、自分の足のつかない深さがダメなんですね。」

タマには色っぽいながらも見た目的に品の良さがあるため、こりいいう口調を真面目な口調で言われるとやたらとムカつく。

「とにかく、これ貸してあげる。」

タマはそう言いつと、私に向けて大きい物体を投げつけた。彼女が投げつけたのは、イルカ型の浮き袋である。

「ネコさんにはお魚さんでしょう。」

タマはこりいづ言つた、

「ああ、添い。」

私がこりいづ言つた途端、若殿からタマにお呼びがかつた。

「じゃあね、お姉さんはお姉さんでお楽しみに。」

こりいづ言つて若殿の元へ向かつタマを見ながら思つた。
(イルカは魚ではないぞ)

優来視点

「さて、後はこれをこうしてと。」

真っ赤に燃える炭の上に網を乗せ、その上に大きく切った野菜や肉を纏めて串刺しにしたのを乗せ、適度に醤油ベースのソースを塗っている。所謂バーベキューである。何故こんな事をしているかと言うと、ついさっきジー・チバーー大会でタマにボコボコにされ、皆が遊んでいる中で僕が一人で用意をしている次第である。

「おお、皿そりー！」

早速匂いを嗅ぎつけた悪友達がやってきた。

「もうすぐ調理完了だからもう少し待て。」

僕はそう言いながらも少し気になつた、緋鞠の気配が全然しないのだ。緋鞠が初めて来た時タマから聞いたが、僕は人より数段高い靈感があるらしく、妖のような特殊な存在を普通より敏感に感じられるらしい。それに、タマほどではないがアイツも割と食い意地が悪いので、炭焼きした肉と醤油ソースの匂いであればすぐに感知してここまでくるはずなのだ。

やはり気になるので、

「それじゃあ、これとこれとこれはもう見えるから。後これは五分加熱してその間にソースを表裏それぞれ五回ずつ塗ればいいから。」
と、悪友達に言い残し緋鞠を探しに行つた。悪友達よ、タマには気を付ける。

優来視点 終わり

「はあ、私だつて水くらい。」

こつ思うのは何度目だろうか、気が付くと浜からかなり離れた場所にいた。

「まさか、かなり流されてしまったか。」

イルカの浮き袋からもつと遠くまで見渡そうとしたら、危うくひっくり返りそうになってしまった。

そして次の瞬間、突如両足がすごい力で海中に引っ張られた。そして、

「えへへ、驚いた？」

海から満面の笑みを浮かべた若殿が現れた、

「若殿！ 驚かでない！」

「えー、せっかくここまで探しに来たのに。」

若殿は私の講義にも不満そうな答えを出した。

「とにかく、元の場所まで引っ張っていくから。」

若殿はこつ言うと、どうやって持ってきたのか、いざといふ時には船の非常用道具を入れておける防水バッグをイルカの浮き袋に括りつけようとした。しかしこの瞬間、

「うおおおおーー！」

突如海底から現れた触手に若殿が捕まり、海底へと引き込まれていった。

「若殿！..」

私も思わず海に飛び込んだが、しばらくしてから自分がカナヅチであることをまさまでと感じことになった。水中では動きづらい上に、思つた以上に周りが把握しづらく、若殿を探す途中で限界が来て、そのまま意識朦朧のまま、どこかへ流されていった。

優来視点

「……ふ……」

誰かの声が聞こえる、

「だい……ぶ……」

誰かが僕を呼んでいる、

「大丈夫ですか？」

あれ、そういうえば緋鞠は、ここはどこだ。

そう思いながら目覚めると、目の前には長い黒髪の女性が心配そうな表情で僕の顔を覗き込んでいた。靈感的に何も感じないので人間なのだろう。

「あの、大丈夫ですか？」

女の人は僕に訊いた、

「えつと、まあ、ところでお姉さんは？」

まあ、年齢的にはお姉さんというよりおばさんだけど、とりあえず初対面の人におばさんは良くないとと思ったので、とりあえずお姉さんと呼んでみた。というか物凄く若々しい人なのだ。すると、

「別におばさんでいいですよ。私は三雁蘭華とあります。」

お姉さん、というよりおばさんはこう言つた。

そして、なぜこの人がここにいるのかと言つと、散歩の途中で偶然見つけたらしい。

「あの本当に大丈夫？必要なら救急車呼ぶけど。」

おばさんはこう言つてゐるが、僕の場合はここ最近人外を相手にタイマンを張つてゐるのだ。あれくらいであれば、「いい運動になつたぜい」と言つてのけられる。

その瞬間である、緋鞠はともかくタマ程では無いが、明らかに人ではない何かの気配を感じた。

「見つけたなの、鬼斬り役。」

その場所から現れたのは、緑色の髪を短く揃えた小柄な少女だった。特徴的なのは、水死体のような白すぎる肌と、人形のように不気味なポーカーフェイスである。

「何者だ！」

僕の問いに、彼女は、

「蛟の妖、静水久。」

と名乗ると、

「鬼斬り役は妖にとつて害悪、よつて滅ぼす。」

と言つて、氷でできた杭のような物を取り出した。

「ちょっと待て、滅ぼすって何？僕、妖には何もしてないよ。」

僕はとりあえず、誰もが行う普通の反応を示した。すると、「それはこちらも同じことなの、私の一族はその昔、そこの女の元の家系である鬼斬り役十二家の一つ、地走家に滅ぼされた、私たちは普通に静かに過ごしていただけなのに。」

少女、静水久はおばさんを指さして言った。

「そうかい、なら僕も黙つて見てる訳にはいかないな。」

静水久の言葉に紛れもない敵意を感じた僕は、近くに置いてあつたバックを取つていった。

「死ね、なの。」

その途端、静水久は手に持つた氷の杭を投げつけた。僕は持つていた力バンでそれを防ぐと、

「変身！！」

と叫び、鞄の中に入れておいた対妖用の武装を取り出し素早く身に着けた。ボースカウトが着るようなデザインで、簡単には傷がつかない素材で出来た装備だが、静水久の投げる氷の杭はかなり固く鋭く、またすごく速いスピードで飛んでくるので、かすつた袖の部分が少し切れた。

「氷が効かない、ならこれなの。」

次に静水久は、僕の足元から大水を発生させた。

「こ)のまま氷漬けにしてやる、なの。」

そして、足元からどんどん水が固まり氷になつていった。

しかし、僕もやられっぱなしではない。足元に神経を集中させた。

「何をしようと無駄なの、この氷は炎でも凍らせる。」

静水久はこう言つた。しかし、僕は次の瞬間、

「おらあ！！！！！」

気合の一喝と共に足元の氷を蹴り上げで粉々に砕き、そのまま静水久の頭をつかんで力の限り投げ飛ばした。

我ながら大成功だと思った。かの武田信玄は、宿敵上杉謙信との戦いで、別働隊で揺さぶりをかけたあと、総攻撃でとどめを刺す「キツツキ戦法」というのを考えていた。今回は、相手に不純物、つまり自分の光渡しの魔力を相手の妖力と混ぜてメチャクチャな状態にし、最後にフルパワーで相手に反撃する。言つてしまえば、不純物が攻略の要となつたので「ナメクジ戦法」であろう。しかし、ここで僕は気が付いた。

(しまつた！いくら相手が妖だからって、今のはないんじや)

そして後ろの蘭華さんも、今日の前で自分が噛みつかれていた右肩を無理やり引きちぎつて、噛みつきから脱出するところを見たような顔になつてている。

「あのおー、大丈夫？」

心配ないとと思うがとりあえず訊いてみた。

「そんな事気にする必要はない、なの。」

やつぱり必要なかつた、静水久は元気だ。そしていつ移動したのか、

僕の首の後ろで氷の杭をあてがつてている。

「单刀直入に訊く、なんでお前がこの力を使う、なの。」

「は？ そんなのこんな力を開発した家の先祖に言つてよ。」

いきなり訊かれるとは思わなかつた事を訊かれ、とりあえず必要最低限の答えを返した。

「先祖…じゃあお前は…」

相手は僕の後ろに立っているので表情は分からなかつたが、声色から察するに、相手は驚いていたのだろう。

「まあいい、今はその命、預けておいてあげる、なの。」

最後に静水久はこう言い残すと、僕の前から姿を消した。

「なんだつたんだ？あいつ？」

後で緋鞠かタマに訊いてみよう。

優来視点 終わり

静水久視点

元来た道を戻りながら私は考えた、

「あいつ、どことなく優斗に似ていたような。」

姿はともかく、根本的な性格やクセは完全に”あの男”と同じといつても過言ではなかつた。でも、どことなく攻撃的な所は、なんとなくあの”狂暴女”的な所だつた。

「ともかく、このままじゃ終わらせない、なの。」

常人の目では見えない、しかし、妖としての私なら数キロ先まで普通に見ることだつてできる。その視力で見たあいつに向けて、聞こえぬ言葉を送つた。

静水久視点 終わり

海と駄のなめじ戦法（後書き）

次回予告

緋鞠がバイトを始めたので、みんなで見に行く事になった。しかし、厄介な店主の騒動に巻き込まれ、優来達の悪戦苦闘が始まる、らしい。

次回「紅茶とメイドとケーキ作り」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7576w/>

おまもりひまり 新世代の鬼斬り役

2011年11月17日21時39分発行